

ひびわれ壺

がん哲学外来メディカル・カフェ in 荻窪 代表・中島秀一

最近、「空っぽの器友の会」を知ることによって、かつて「ひびわれ壺」を読んだ時の大きな感動が鮮明に甦ってきました。この「インドの民話」は「子どものコーチング」で有名な菅原裕子氏が翻訳され、ネット上でも大きな反響を呼んでいます。

「水汲み人は天秤棒の左右に壺をさげて水を運びます。完璧な壺は一滴の水もこぼさず主人に届けます。ひびわれ壺は半分しか届けることができず、恥ずかしい思いで、いつも水汲み人に謝っていました。すると水汲み人は「道端の花が君の側にしか咲いていないのに気づいたかい？ ぼくは君が通る側に花の種をまいたんだ。そして君は毎日、水をまいてくれた。この2年間、ぼくはご主人様の食卓に花を欠かしたことがない。君があるがままの君じゃなかったら、ご主人様は、この美しさで家を飾ることはできなかったんだよ」。

「あなたは、そこにいてだけで、価値ある存在なのです。」(樋野興夫)

愛編む「がん哲学 (I am がん哲学)」

がん哲学外来市民学会 広報担当 星野昭江

この日の「東村山カフェ」は満席だった。主宰の大弥さんの笑顔に促され「ニュースレターを背負ってたった今、信州小諸から到着しました」とカフェに遅刻した私は汗を拭きながら、樋野先生との最初の出会いのこと、がん哲学外来研修センターニュースレターがもうすぐ100号を迎えることなどを話した。「星野さん発行のニュースレターは私にとって一つの良き出会いの場です」というKさん、「がんに罹った友人に毎回印刷して郵送しています」というYさん…、発行のたびに多くの読者の方たちから励ましメールが届く。創刊から最近号まで延べ200人の方たちに原稿を寄せて頂いた。書いてまた書き直して寄稿して下さいました方たち、その深い想いを原稿の行間に読み取った時の感動…。その心温まる「出会い」に支えられ、今までニュースレター発行を続けることが出来た。「あらたな出会い」…、神さまからの素晴らしい贈り物に感謝する日々である。



樋野興夫先生 星野昭江先生

がん哲学外来カフェに加わって

目白町教会員 青柳成樹

目白町教会での樋野先生の講演会をきっかけに、森尚子さんが代表になって下さり「目白がん哲学外来カフェ」が始まりました。あっという間に一年が過ぎました。空っぽの器のように存在する「教会堂」が、ガンと戦っている方々を含め多くの人々に開かれていること、また、いささかの役に立っていることを感じ、喜び感謝しています。

今と違い私たちの父母の時代にはガンを自らも周囲も表立って語ることもなく運命として黙って受け入れていたように思います。私はガンになった叔父や父など肉親の心の内を推し測りもせず、語り合うこともせず永遠の別れをしたことを今は悔いています。

目白のカフェではガンを経験したことのある人の経験に耳を傾け、最新の医療情報を交換し、悩みを分かち合い、生きる力を皆が得ています。ここにはかけがえのない輝く人生の日々があります。

その中で私はガン告知と余命宣告を受けたというご婦人の言葉が忘れられません。「神さまがこの世での私の務めが終わったと教えて下さった」と明るくおっしゃったことです。私はまだこのように受け止める心の準備・信仰には至っていません。「神のみ業があなたに現れるためである」とのみ言葉を信じますかと問われているのではないかと思います。私も「目白がん哲学外来カフェ」に裏方として加わることで、皆さまから力をもらい、更には自分の人生の終りへの備えにもなっているような気がしています。

多くの人々に支えられてこの活動がいつまでも続きますように。



今回は三人の方にご寄稿いただきました。9月に開所したばかりの「メディカル・カフェ in 荻窪」の中島秀一先生の原稿を載せさせて頂きました。

また、がん哲学外来研修センターとして長野県小諸より星野昭江先生からのメッセージも頂いております。

そして、目白町教会員の青柳成樹さんは「目白がん哲学外来カフェ」の最初からのスタッフでいらっしゃいます。

「メディカル・カフェ in 荻窪」は閑静な住宅街の素敵な教会で開催されています。是非お立ち寄り下さい。

編集：青柳志保(Eメール: shihoaoabamakoto@gmail.com)

一般社団法人がん哲学外来ホームページ <http://www.gantetsugaku.org/>